

やまだばし思い出テラス —価値認識の醸成を通じた橋詰残地のデザイン—

羽野 暁¹

¹正会員 九州大学 キャンパスライフ・健康支援センター
(〒819-0395 福岡市西区元岡744, E-mail: hano.satoshi.557@m.kyushu-u.ac.jp)

鹿児島県始良市に架かる戦前のコンクリート橋「山田橋」の架け替えに際し、山田小学校、山田校区コミュニティ協議会との連携により、高齢者と子供が交流する世代間交流の場や、思い出を語らう井戸端会議の場の創出を通して、山田橋の価値認識を醸成する取り組みを実施した。戦前のコンクリート構造物は、型枠大工や左官工の丁寧な手仕事による繊細な意匠造形を有しているが、一般に地域住民や自治体行政において文化的な価値認識は低い。竣工以降、老朽化とともに交通基盤としての構造的価値は低下するものの、時間経過とともに趣や風格は増加し、また、永く供用されることで住民の愛着が増し、趣や風格のある姿は地域の誇りとなるなど、地域住民における精神的価値は増加する。やまだばし思い出テラスは、日常に埋没したこれらの価値を顕在化することで、活性化資源としての有効活用を試みた。

キーワード: 残地利活用, 橋詰広場, 世代間交流, シビックプライド, 地域遺産, 高欄意匠, コンクリート橋

1. はじめに

中山間地域で過疎高齢化が進む中、住民が豊かさを実感し誇りを持てる地方の創生が求められている。地域の近代化を担った戦前のコンクリート橋梁は、昭和モダンの流行に沿った趣深い造形を有する。都市化が遅れた中山間地域にわずかに残るこれらのコンクリート橋梁は、有効利用により地域の活性化に寄与できる貴重な地域資源であるといえる。鹿児島県始良市の中山間地域に現存した山田橋は、昭和4年竣工のコンクリート橋梁であるが、老朽化と自動車交通の増加に伴い平成30年に解体された。解体後も地域の記憶を継承し、住民の交流の場となるような残地のデザインに向け、著者らは、地域古老ヒアリングに基づく同橋の歴史紙芝居の制作と小学校での実演会の開催や、灯籠づくりワークショップと灯籠点灯による同橋のライトアップイベントなどを通して、地域における山田橋に対する価値の気づきや愛着の醸成を図った。その上で、解体後の残地のデザインにより、地域の記憶を次世代につなぐ、地域の小さな拠点となる場の創出を試みた。

2. 山田地域の地域特性と山田橋の概要

山田地域は、藩政期から昭和初期の歴史的構造物や風習など歴史文化が残る。旧山田麓の中心街路周辺には藩政期からの名残を感じる加治木石の石塀が連なり、同街路の北端には日露戦争従軍者の帰還を祝い明治39年に建造された石造の凱旋門構造物である「山田の凱旋門」



写真-1 山田橋の橋下と橋上

戦前のコンクリート橋梁は丁寧な手仕事による繊細な造形を有している。手仕事の造形は時間経過とともに趣を増し、風景的価値は増加している。

が鎮座している。歴史的価値が高い山田の凱旋門は国の有形民俗文化財に登録されており地域のアイデンティティとなっており、山田橋は、旧山田麓の中心街路を通り山田の凱旋門と両端でつながっている。山田橋の橋脚や高欄にはアーチ形状の造形が多く、凱旋門と雰囲気合わせたと考えられている。山田橋は、地域のもうひとつのアイデンティティである清流・山田川に架かる。山田橋の橋上からは地域に広がる田園風景や自然景観が一望でき、飛来するカワセミやヤマセミなどの野鳥観察は、地域の子供にとって貴重な環境学習の場になっている。



写真-3 山田橋歴史紙芝居実演会の状況

(2)和紙灯籠づくりワークショップ

山田橋の歴史紙芝居実演会において、実演終了後に児童から、戦時中の供出により親柱の照明が撤去された“山田橋くん”に、もう一度照明を点けてあげたいとの声が上がった。山田橋の架け替え事業は現橋の下流側に隣接して新設橋を整備する橋梁付替え事業であり、新設橋の竣工から山田橋の解体工事開始まで若干の時間的間隔が生じた。その間、山田橋と新設橋は平行して供用されたが、自動車交通は新設橋に移行され、山田橋は歩行者専用路として利用された。山田橋の橋上が安全にイベント等に利用できる空間となったことから、山田橋の橋上を手作りの灯籠で灯す点灯イベントを企画し、同イベントで設置する灯籠を地域の子供と高齢者が一緒に制作する住民参加型ワークショップを開催した。

山田橋の灯籠づくりワークショップは、平成 29 年 9 月 14 日、山田小学校体育館にて山田小学校の全校生徒 69 名、保護者および地域の高齢者 15 名、および、山田小学校教職員が参加して、灯籠のシェードとなる和紙に絵を描くワークショップを開催した。灯籠シェードと和紙の作画はクレヨン、水彩絵の具、ちぎり絵和紙など小学校の各学年の学習レベルに合わせた道具を用いて実施した。和紙には、山田川の野鳥や鮎、川エビ、花など山田地域の思い出の風景が描かれた。灯籠の制作過程では、小学校教員、生徒、および、地域住民の間に、山田橋や山田地域の思い出の風景に関する会話が生まれ、世代間交流の機会となった(写真4, 5, 図-3)。



写真-4 灯籠づくりワークショップの会場

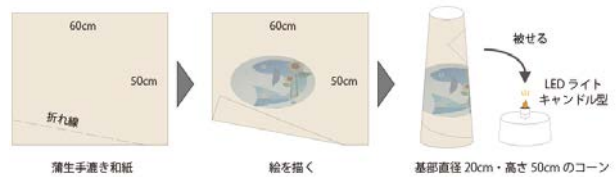
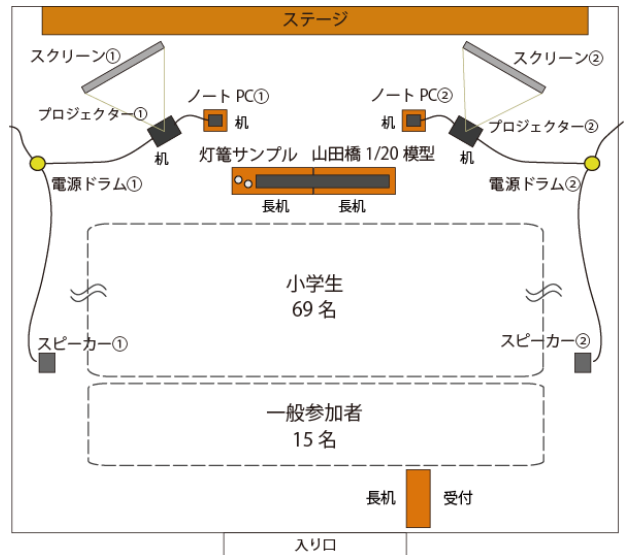


図-3 会場レイアウト(上)と手作り灯籠の概要(下)



写真-5 シェードとなる手漉き和紙に絵を描く参加者

(3) 灯籠点灯イベント

灯籠づくりワークショップを受けて、山田小学校の生徒および地域住民が制作した灯籠を橋上に設置し点灯するイベントを開催した。平成29年9月22日、山田橋の橋上に150基の灯籠を設置して点灯した(写真-6, 7)。点灯イベントの会場は日没前からにぎわい、地域の内外から200名を超える参加者が来場した。灯籠点灯式は、山田地域の年間最大行事である「山田の里かかし祭り」の前夜祭として、山田校区コミュニティ協議会と連携して開催した。山田橋の橋上にはワークショップにて制作した和紙灯籠を設置したが、兩岸の橋詰広場、左岸側の西田の田の神様石像位置、山田の凱旋門前広場、および、かかし祭りのかかし展示会場の計4か所に、山田校区コミュニティ協議会が所有する竹灯籠を設置した。点灯式当日は、来場者に地域内の4か所の灯籠めぐりを紹介する「山田の里灯籠めぐりまっふ」を配布し、散策を誘発した。

山田橋灯籠点灯式の当日は、日没前から地域の子供や保護者、高齢者等多くの参加者が来場した。会場の山田橋の橋上は、子供たちが走り回り、にぎやかな空間となった(前掲写真-6)。日没後、灯籠を点灯する時刻になると、地域外からも多くの来場者が山田橋を訪れた。下流側に並行して架けられた新設橋は、灯籠の風景を眺める視点場となり、恰好の撮影場所となった。多くの写真愛好家が三脚を構え、長時間撮影に没頭した。橋上は、地域の思い出を語り合う井戸端会議の場となり、高齢者は往時のにぎわいを懐かしみ、若者や子供は縁日のような高揚感を共有した(前掲写真-6, 7)。



写真-6 縁日の参道のようににぎわいの橋上



写真-7 橋上の灯籠の点灯状況

4. やまだばし思い出テラスのデザイン



図4 やまだばし思い出テラスのコンセプトイメージ



写真-8 竣工後のやまだばし思い出テラス



図-5 やまだばし思い出テラス（3つの残地ポケットパーク）全体平面図

山田橋の新設橋を下流側に建設し道路を付け替えたことで、解体した山田橋の兩岸に3箇所の残地が発生した。この残地にポケットパークを整備した。3箇所のポケットパークと周辺の状況を全体平面図（図-5）に示す。山田橋は永く地域の往来を支え、住民にとっては多くの思い出が刻まれた生活景の一部であった。山田小学校の児童にとっては毎日の通学路になっており、日々の登下校とともに原風景の一部となっている。兩岸の残地のポケットパークは、山田橋の橋上空間の印象が強く残る親柱と高欄を再利用するとともに、道路付け替え前の生活動線の記憶が残るよう指向性に配慮した（図4、写真-8）。

山田川左岸の橋詰広場に整備したポケットパーク対象地 A と右岸の橋詰広場に整備したポケットパーク対象地 B は、親柱を原位置に残し、河川に面する範囲に山田橋の高欄を移築し、基部を嵩上げて転落防止柵としての機能を持たせ再利用した（図-6、図-7 に示す赤色部分が移築高欄の配置レイアウトである）。高欄の再利用により歴史感のある山田橋の雰囲気 inheritsするとともに、重厚感のある高欄で橋詰公園を囲み、利用者に安心感を与える効果を期待した（写真-9、写真-10、写真-11）。

高欄の移築に際しては、苔類や蔦類など表面の植生を残し、洗浄等により歴史的な風合いを損なうことなく施工した。山田橋のコンクリート高欄は、アーチ形状の開口と中柱が直線上に連続する一体の壁高欄であり、再利用に際しては、カット位置の工夫によりタイプ A～G の7タイプの異なる高欄ピースとして切り出した（図-8 と写真-12 に例としてタイプ B を示す）。高欄はコンクリートカッターで丁寧にカットし、荷重を分散して吊り上げ運搬した（写真-13）。カットした高欄ピースを残地の平面形状に合わせて直角に折れながら配置した。高欄ピースを突き合わせるコーナー部は、親柱の意匠を踏襲した新設コンクリート柱を設置して全体の雰囲気を収めた。これらの工夫により、山田橋の雰囲気を継承しつつ新たな利用を促す場所の創出を目指した。



図-6 ポケットパーク対象地 A：左岸橋詰広場平面図



図-7 ポケットパーク対象地 B：右岸橋詰広場平面図

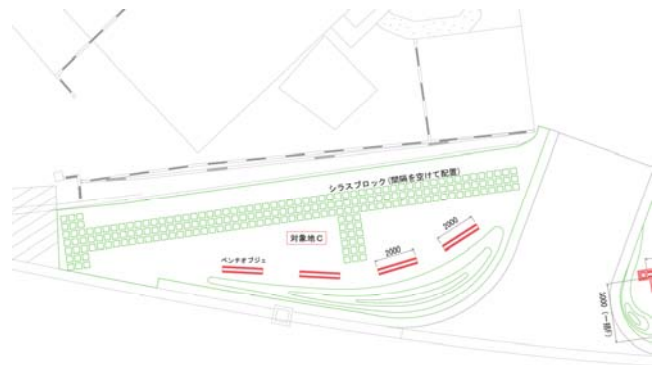


図-8 ポケットパーク対象地 C：右岸付替え道路残地平面図



写真-9 ポケットパーク対象地A：左岸橋詰広場



写真-12 一括カットした高欄ピースの例（タイプB）



写真-10 ポケットパーク対象地B：右岸橋詰広場



写真-13 高欄カットの施工状況



写真-11 ポケットパーク対象地C：右岸付替え道路残地

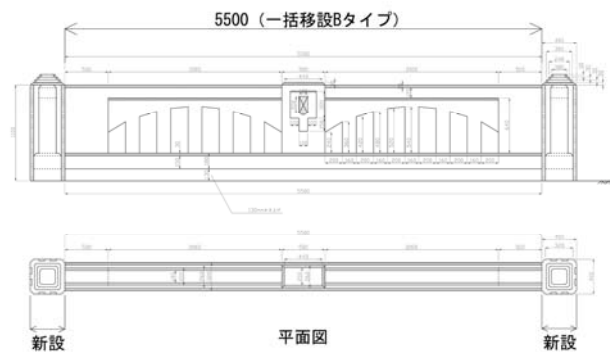


図-8 高欄ピースの例（タイプB）

5. 期待する今後の展開

山田地域は、歴史的な観光資源や豊かな営農文化を反映した地域資源が冒頭の図-1に示すように点在している。始良市観光協会と連携して、これらを巡るフットパスコースを整備した。やまだばし思い出テラスはこのフットパスコースの中間地点に位置し、休憩スポットとして居心地のよい場を提供している。今回のポケットパーク整備に使用しなかった山田橋のコンクリート高欄を始良市が保管している。フットパスコース沿いの各スポットに山田橋のコンクリート高欄をベンチやオブジェとして再利用して配置することで、点在する地域資源をつなぐ役割も期待できる。

今回対象とした山田橋は、老朽化に伴い各地で架け替えが進められている戦前のコンクリート橋である。地域資源として価値を有するこれらのコンクリート橋は、道路構造物としての機能低下により動態保存は叶わなくとも、地域における価値認識の醸成とともに、貴重な地域資源として利活用することが可能である。積極的な保存・利活用が望まれる。

謝辞：本研究の一部をJSPS科研費 JP17K18307の助成を受けました。記して謝意を表します。